

第二学年・プロジェクト学習実践報告

小 泉 尚 子 (第二学年主任・国語科)

I はじめに

2020年度の校内PBL発表会¹後、「次年度はLHRの時間を使って“プロジェクト学習”を始めよう」と学年の生徒全員に呼び掛けた。コロナ禍でクラブ活動や様々な教育活動が制限される中、一人ひとりが「高校でこんなことに取り組んだ」と語れるものができるといいと思い立っての企画だった。また、1年次の終わりに差し掛かったこの時点で、次年度に控えた研修旅行先が従来と同じコースの台湾か代替の阪神淡路になるか確定せず、事前学習をどちらも進めていかなければならない状況にあり、限られた時間の中で実りある学習ができるよう、何か手を打たなければと思つての企画であった。台湾と阪神淡路、どちらも事前学習に取り組みさせて消化不良になるよりは、それぞれが興味ある方を調べ、発表し合い共有することで効果的な学び合いができるのではないかと考えた結果の提案である。

研修旅行候補先の事前学習に限らず、生徒がクラスの枠を超えて“プロジェクト”ごとに分かれ、学年行事がそのメンバーで主体的に運営されるようになれば理想的であるし、また興味がある活動にもっと打ち込める時間が保証されるようになると良いであろうと考え、プロジェクトの案をさらに複数加えて設定した。

¹ 3年生の卒業論文発表や海外研修報告等、課題解決型の学習成果報告を聴く会。この年は2021年2月24日に実施。コロナの影響で海外研修が中止になったため、2名の卒業論文発表のみが行われた。

こちらから提案したのは、「台湾」「阪神淡路」「グローバル」「コンサート」「日商簿記」「理数探究」「ボランティア」「模擬裁判」「模擬国連」「ストックリーグ」「ビジネスコンテスト」「環境保全」である。生徒にどのプロジェクトに興味があるかアンケートをとり、さらにこの他にどんなプロジェクトがあるといいか調査し調整した結果、「環境保全」は消え、新たに「歴史探究」が足されることとなった。

II 各プロジェクトの活動報告

文化祭や音楽祭の準備、研修旅行の全体事前学習、進路選択の説明等の合間を縫って、プロジェクト学習としてLHRの中で活動できたのは年間を通して4回(1学期2回[5/26・6/9]、2学期1回[9/15]、3学期1回[2/2]実施)であった。だが、LHRの時間外も活動時間を設けたプロジェクトもあり、様々な成果を残せた活動となった。

各プロジェクトの活動内容と活動を終えての生徒の感想を以下で紹介したい。

1 台湾(担当:新井原教諭、土井教諭 生徒80名参加²)

「感染状況が落ち着けば研修旅行に行けるかもしれないので、台湾のことをもっと知りたい」³と考える生徒達が集まった。1、2学期はグループになり自分で選んだ台湾の文化や歴史について調べ、発表資料も作成した。2学期は①文化祭の展示用シートを作るグループ、②世田谷文学館に行き台湾の特別展示を取材するグループ、③3学期に行う台湾の学生を迎える会をリードするグループの3つに分かれ、それぞれの活動を行った。3学期にはSNET台湾⁴の

² 生徒の参加人数は最終回の参加人数とする。毎回移動希望を許可していたので、若干の増減があった。

³ 渡航が困難な状況は依然として変わらず、台湾研修を中止とし、研修旅行は阪神淡路に決定したことを生徒に告げたのは1学期終業式の一週間ほど前である。終業式後開催の保護者会でも、台湾中止の旨を正式にアナウンスした。

⁴ SNET台湾(日本台湾教育支援研究者ネットワーク) <https://snet-taiwan.jp/>

山崎直也先生からご紹介いただいた台湾の留学生（一橋大学、慶應義塾大学、早稲田大学の大学院生及び大学生）の4名の方々をお迎えし、プロジェクトメンバーが囲んで交流会を行った。台湾に行くことは叶わなかったが、知識が深まったこと、その知識をもって文学館に向けたことや留学生の話を聴けたことに楽しさを見出せたようである。

【生徒の感想】（傍線小泉、以下同様）

- ①このプロジェクト学習を通して、台湾についてより詳しくなる事ができたと感じました。台湾の歴史や文化、食について様々なことを学ぶことができ、良かったです。大変だったのは世田谷文学館まで行ってレポートを書いたことです。少し遠くて大変だったけれど多くの展示があり、見て台湾について実感することができました。楽しかったのは留学生との交流です。実際に台湾に行かないと分からないような事を沢山学ぶことができた良い経験でした。またこのようなプロジェクトがあればいいと感じました。
- ②自分たちで台湾について調べて、学びを深めた後に実際に台湾の方々のお話を直接聞くことによって、地名や歴史についてお話された際に理解ができて、スムーズに話が入ってきたことにいちばんやりがいを感じました。台湾の方々の中には日本に惹かれて留学したとお話された方がいて、台湾についてのプロジェクト学習でしたが、日本と台湾の両方の魅力を感じることができました。最初は全く知識のない台湾についてまとめて掲示物を作るのは大変でしたが、知識が身についている達成感があり良かったです。



左：グループで台湾のことを調べる



右：台湾の留学生との交流

2 阪神淡路（担当：大館教諭 生徒65名参加）

台湾が中止になったら国内の代替として阪神淡路に行くということで、より詳しく防災や現地のことを学んで研修旅行に行きたい、という生徒が集まった。1、2学期は研修旅行の概要を知り、クラスで配布された防災ブック『東京防災』（東京都総務局総合防災部）を使用した避難所経営のシミュレーション、現地でワークショップを開いていただくNPO法人プラス・アーツ⁵が開発したカードゲーム「みんなで遊んでたすカルテット」の体験を行った。カードゲームは、実際の研修旅行最終日に行ったワークショップで「高校生にヒットする防災教育プログラム」を考える際に役立つ⁶、という感想が寄せられた。どうしたら防災を楽しく学べ、身近に感じさせることができるのか、実際に自分達が体験してみることでより現実的に考える機会となったであろう。

3学期は研修旅行の事後学習ということで、防災の他にテーマとして掲げていた「地方創生」に取り組もうとしている卒業生（52期1名、53期2名）の話を聴いた。卒業生は地方創生に関心を持ち、就職活動の際も関連の事業に携わりたいという思いを抱いて動いた方達である。それぞれの卒業生の話は「聴けて良かった」と好評だった。

【生徒の感想】

- ①研修旅行前は防災についての学習がメインで、事前学習としてだけでなく普段の生活にも役に立つような学習ができました。実際に避難所で生活をした人々の体験してみないとわからない避難所での困難を知りました。また、それに対しての解決策を探すことは難しかったです。答えのない解決策の中で一番適切な対応を考えなければいけないので人によって違い、自分に考えられない発想を知ることもできました。防災に関するゲームは運で左右するこ

⁵ NPO法人プラス・アーツ <http://plus-arts.net/>

⁶ 阪神淡路研修旅行では、最終日に300余名が一堂に会し、プラス・アーツ理事長永田氏にご指導頂きながら高校生向けの防災教育プログラムを考案・プレゼンするというワークショップを行った。事前学習や現地研修で学んだことを活かし、考えたことをアウトプットできる格好の機会になった。

とが多かったけれど、みんなで防災を知りながら、楽しめました。

②避難所の運営シミュレーションやNPO法人プラス・アーツが制作した「防災」をテーマにしたカードゲーム「たすカルテット」で実際に遊ぶことで、防災対策の重要性を改めて認識しました。特に「たすカルテット」は研修旅行で訪問したワークショップでアイデアを練る際に大いに役立ちました。

また、卒業生による就職活動セミナーでは、コロナ禍での就活の大変さを知ることが出来ました。私達が実際に就活する時も現在と状況が変わっていないという保証も無いことを考えると、とても良い機会だったと身に染みて感じました。



左：カードゲーム「たすカルテット」体験



右：卒業生の話を聴く会

3 グローバル（担当：大塚教諭 生徒11名参加）

「学校と世界をSDGsで繋ぐ」とし、SDGsの見方・考え方を用いて学校生活や日常生活をどのように改善していけるかを考えた。2学期後半から3学期にかけては、2チームに分かれ「SDGs QUEST 未来甲子園」⁷に応募し、うち1チームが首都圏大会ファイナル（セレモニー）進出を果たした。この取り組みについては本号掲載・大塚教諭の「コロナ禍におけるグローバル教育の実践」(5) グローバルプロジェクト (p.75～) に詳しいのでそちらをご一読いただきたい。

⁷ SDGs QUEST 未来甲子園 <https://sdgs.ac/>

2月の最終回は、NPO法人HERO⁸ 代表の橋本氏を迎え、学研と共同開発中のSDGsすごろくのモニターとなり、遊んだ感想を述べた。SDGsを軸に据えた様々な活動を体験し、国際的な視野を獲得でき、主体的に関わることの大切さを学べたようである。

【生徒の感想】

①学校にある課題をSDGsに関連付けて解決するアイデアを考えるのは難しかったです。私たちは食堂のプラスチック容器に目をつけて環境に優しい容器を考えました。調べていくうちに新たに知ることが多く面白かったです。理解しやすく見やすい構成にしてパワポを作成するのは大変だったけれど、グループの人とコミュニケーションをとりながら楽しく進められました。他クラスとの交流ができて良かったです。改めて考えると様々な課題があり、もっとより良い学校にしていけると思いました。

②今回のグローバルプロジェクトで、特にSDGsについてとても多く学んだ。夏休み期間中に自分の興味あるSDGsと解決策を調べて発表した時にはみんなからいろいろな意見や調べた結果が出て、とても面白く、勉強になった。また、最終日にやったSDGsすごろくもゲームとしてとても面白く、またもっと色々解説とか、要素を追加すれば小さい子にもわかりやすく、考えさせられるものになると思った。グローバルプロジェクトは国際問題について考えさせられる、とてもいいプロジェクトだったと思う。

③SDGsを生かした画期的な企画を出すという活動に参加した。テーマから具体的な案、理由付け、どのような効果が見込めるかなど一つ一つグループのメンバーと話し合って決めた。何も無いところから、自分たちの頭の中にある情報や知識だけで案を生み出すのが想像以上に大変な作業だった。なぜ大変だったか、二つの理由を挙げられると思う。一つ目は、自分が日頃からSDGsで謳われているような問題にアイデアを出すという角度で見ていな

⁸ NPO法人HERO <https://npo-hero.org/about/>

いこと。ただ知識をインプットして学んだつもりになっているのだろう。二つ目は、学校の授業でもその他の学習でも、常に自分を先導してくれる人がいて、テーマなどを与えてもらっていたということだ。自分からテーマを調べて決めることの難しさがこれを表すと思う。これからも、周りに複数人がいる状態で、意見を出しあって案を作るという機会を自分で見つけて、そのときに上記の問題点を克服していきたい。



左：学校生活とSDGsを紐付ける



右：SDGsすごろくモニター体験

4 歴史探究（担当：榎本教諭 生徒13名参加）

生徒の「歴史をもっと学びたい」「授業で扱わないような資料も読んでみたい」という声から発足したプロジェクトである。「全国高校生歴史フォーラム」⁹「図書館を使った調べる学習コンクール」¹⁰に中島飛行機について調べ共同作成したレポートを出品、特に「図書館を～」では杉並区で奨励賞、全国で優良賞を受賞した¹¹。こちらも、本号掲載の別稿・榎本教諭の「プロジェクト学習『歴史プロジェクト』実践報告」（p.137～）に詳しいのでそちらをご覧ください。

生徒がレポート作成を終えて口々に言うのは「探究マップ」を使ってうまく

書けた、ということだった。誰にアドバイスされずとも、自然な形で活動の中で取り入れていたという。国語の授業で使い慣れているツールを他科の学習でも役立てているのは喜ばしいことである。彼らの好きな歴史を思い切り語り合える場を設けられたことと共に、教科横断型の学びの望ましいスタイルも示せたことに意義があったのではないかと考える。

【生徒の感想】

- ①歴史プロジェクトでは教科書に載っていない歴史を深く学ぶことができるとも楽しく充実した時間でした。また、自分達で何かテーマを決め、問いを定め仮説を立て、資料を探して、まとめて一つの論文にするという経験をチーム一丸となってできたのはとても良いことだったと思います。人と協力して歴史をより深く学びより良い論文をつくる。荒っぽい出来かもしれませんが完成した時はとても嬉しかったしやりがいを感じました！また、普段授業で使う探究マップをうまく活用して論文を作れたのも良い経験だと思いました(探究マップのおかげで簡単に文章や構成を考えることができました)。「調べる学習コンクール」では優良賞という名誉ある賞をもらえ、とても充実したプロジェクト学習でした。
- ②夏休みいっぱいかけて歴史プロジェクトのメンバーで論文を書きました。初めて論文を書いたので、不慣れなことも多かったです。が、じっくり考えて文章を書いて、とても楽しかったです。来年度は卒論を書くので、その練習になったと思います。文章を考えている時も楽しかったです。図書館で情報が載っていそうな本を探したり、みんなと相談しながら必要そうな情報を本の中から抜き出したりする作業が一番楽しかったです。あまり家族以外に歴史好きの人に会ったことがなかったので、好きなだけ思いっきり好きな話をすることができ、嬉しかったです。

⁹ 全国高校生歴史フォーラム <http://www.nara-u.ac.jp/forum/>

¹⁰ 図書館を使った調べる学習コンクール <https://concourstoshokan.or.jp/>

¹¹ 10万6千点を越える作品の中から入賞29作品、優良賞126作品、奨励賞242作品、佳作1179作品が選ばれた。



左：グループに分かれ思う存分歴史談義



右：夏休み中も集まり、図書室でレポート作成

5 コンサート（担当：富澤教諭 生徒47名参加）

7月に予定していた富澤教諭とチェリストの松本氏、ヴァイオリニストの合田氏によるジョイントコンサートの開催に向けて、無事進行できるよう役割分担を決め準備を行った。司会・インタビュー役からプログラム作成、譜めくりや椅子運びに至るまで、すべての係を本プロジェクトメンバーが行った。裏方として動く存在があるからこそ一つの企画が成り立つということを実感できた、という感想が多く寄せられた。

また、出演したのは10名弱だが、11月の文化祭でも有志として演奏を行った。出演した生徒の感想には「楽しかったのでまたやりたい」と記されていた。

このプロジェクトでは、7月のコンサートの実施成功体験をもとに、自主コンサート計画等もやってはどうかと検討していたが、コロナ禍による相次ぐ学校行事の予定変更や、演奏や歌唱の活動制限等が重なり、実現が難しくなってしまった。音楽・芸術関連の文化活動にもっと携わりたいという生徒が多数いることを今回確認できたので、いずれもっと発展させていければと考える。

【生徒の感想】

①コンサートプロジェクトということで、一から学校の行事の作成に取り組むことができ、責任感と達成感を大いに感じることのできるプロジェクトだった。プログラムの案を出したり、ステージの設営をしたりなど、かなり主体的に取り組むことができる活動だったので、サボりがちな自分も熱を入れて

取り組むことができた実感している。それぞれの担当、実行委員長などもすぐ決まり、雰囲気もとても良かった。

②プロジェクトが始まってすぐに富澤先生とチェリスト、ヴァイオリニストの方をお招きして開かれたコンサートの運営に参加したのですが、コンサートをスムーズに進めるためには裏でしっかりと準備をしないといけないんだなと感じました。また、富澤先生やチェリスト、ヴァイオリニストの方の息の合った演奏がとても魅力的で、楽器のみのコンサートは行ったことがなかったのでもとてもいい経験になりました。富澤先生のピアノの演奏は心が落ち着く感じがしてとても引き込まれました。コンサートのプロジェクトは私自身当日の動きがメインだったけれど、何かを行うためには後ろで支えている人がいるということを知れるとてもいい機会になりました。



左：座席案内をするプロジェクトメンバー



右：コンサート終了後、メンバーと先生方で記念撮影

6 ボランティア（担当：石川教諭 生徒24名参加）

前半は病院や施設に送る折り紙作品の作成（欧米ではホスピタルアートとして定着している活動）および医療・福祉従事者用ビニールエプロンの作成、後半は南アフリカの子供達に送る絵本の翻訳に取り組んだ。前半の活動は日野市、あきる野市のボランティアセンター¹²や埼玉県和光病院との協力、後半の活

¹² 日野市ボランティアセンター <https://www.tvac.or.jp/dantai/1247>
あきる野市ボランティア・市民活動センター
http://akiruno-shakyo.or.jp/volunteer_center/index.html

動は特定非営利活動法人アジア・アフリカと共に歩む会 (TAAA)¹³ との協力による活動である。こうした関連機関と連携することで、教室に居ながらにしてのボランティア活動が実施可能になった。絵本を受け取る先の南アフリカの子供達は、両親が揃っていない状況で生きる子供が多い。だから「父親」「母親」が出てこない本、仲間と協力して楽しく暮らす本がいい (よって『ぐりとぐら』は大歓迎である)¹⁴ という事情を鑑み、生徒なりに適当な絵本を選定していた。こうした、先方の状況に合わせてできることを行うという体験を通じ、支援とはどのようなことかを改めて考えたのではないだろうか。

【生徒の感想】

①プロジェクトを選ぶ時に、ボランティアを見て、ボランティアって言われてみればあまりやったことがないかと思い、参加を決めました。誰かに賞賛されるためのものでもないし、何かやってほしいことはありますかー！？と聞くものでもなく、これをやって欲しいと言われたものに対して、ひっそりと行うものである、という言葉が印象に残りました。

一学期に行ったホスピタルアートは、入院患者の方々に喜んでもらえるかな？と考えながら作るのが楽しかったです。また、二学期に行った絵本の翻訳プロジェクトは、アフリカの子供たち側に立って、どんな本がいいか考えたり、翻訳したりしました。私たちが送った本が、アフリカの子供たちの宝物になってくれたら嬉しいです。一年間を通して、ボランティアの本質を知れたり、自分からだったら参加しないようなことができたりして、自分の世界が広がったなと感じました。

②人の為に何かできたらいいなとは思っていましたが、ボランティアを本格的にやったのは今回が初めてでした。ホスピタルアートやビニール袋から作る手作りエプロンは自分達でも簡単に作ることができました。一番苦労したの

は絵本の取り組みです。絵本が集まらなかったり、翻訳を貼り付ける際に誤字が見つかって直したりと大変でした。けれどこの絵本を小さい子供が読んで喜んでくれるようにと丁寧に作りました。自分でも無理なくできるボランティア活動だったので楽しめました。



左：ホスピタルアートやビニールエプロンの送付先からのお礼紹介

右：絵本に英語訳やズルー語訳のシールを丁寧に貼る生徒達

7 理数探究 (担当：辰見教諭、家本教諭 生徒19名参加)

理数分野の中でも、プログラミングに関心がある生徒が多く集まった。前半は「ボロノイ図」¹⁵ について基本的なレクチャーを受け、次の時間には九州地方を県庁所在地を母点とし、ボロノイ分割を実際にやってみた。後半はネット上でボロノイ図を用いて探究してみたい素材を探し、Geogebraでボロノイ図を実際に作成し、考察を加えた。

【生徒の感想】

①今回のプロジェクトで習ったボロノイ図は今回初めて知ったものでしたが、実際に話を聞くと聞いていた以上に身近にあるもので驚きました。僕は実際

¹³ 特定非営利活動法人アジア・アフリカと共に歩む会(TAAA)

<http://www.taaa.jp/>

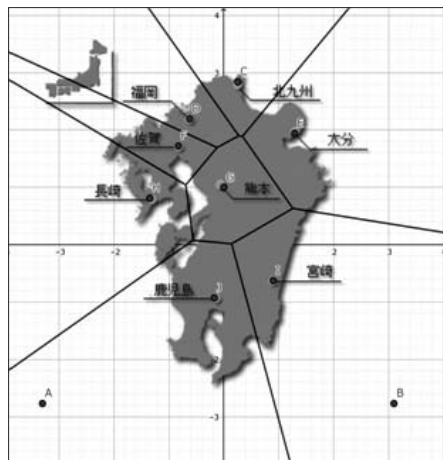
¹⁴ 「ぐりとぐら」プロジェクト (TAAAのHPより)

<http://www.taaa.jp/guri-gura.html>

¹⁵ 平面上に配置された複数個の点(母点)に対し、平面内の点がどの母点に一番近いかを領域分け(ボロノイ分割)した図。2022年度以降採択で、「数学A」の発展的・探究的な学習内容として掲載している教科書もある(東京書籍『数学A Advanced』「②最寄りの店舗を探そう」p. 118-119)。

に九州の空港についてボロノイ図を作りました。それを作って感じたことはそれぞれの空港が都道府県の中心都市にあるだけでなく、どこからでも空港にアクセスしやすいように配置されている事が分かりました。このプロジェクトを通して、普段学習している数学が身近な様々な物に関連していると分かったので、身の回りで数学が利用されているものを探してみたいと思いました。

②主にボロノイ図を作る作業をしました。2つの点の垂直二等分線を作図してエリア分けするものでした。九州地方をボロノイ分割する作業や、中杉の周りをボロノイ分割することによって、それぞれの場所から近いエリアを導き出すなどの作業をしました。三角形の重心の知識など数学Aで学んだ内容の理解が深まった感じがしました。特に、中杉の周りをボロノイ分割する作業では、普段は何気なく歩いていた場所が、どんな距離感で位置していたのか改めて気づく良い機会になりました。



左：初回の活動でボロノイ図を知る生徒達
右：生徒が実際に九州地方の空港の場所をボロノイ分割し、実際の県境と比較したもの。「実際の県境と近いものになり、どの県もアクセスしやすい場所に空港が作られているとわかった」と考察している

8 日商簿記（担当：滝澤教諭 生徒17名参加）

簿記は総合ポイント付与の対象になる「総合探究」の一つとして、中大経理

研究所による2級および3級を受験するための対策講座が毎年開講されている。が、コロナの流行に伴いオンライン学習が中心となり、学習は大いに個々の自主性に任されているのが現状である。同じ学年の中で仲間はどのくらいいるのか、どのように勉強しているのかを共有できる場があるといいだろうと考え、簿記のプロジェクトも設けることにした。活動時間の中では、いくつかのグループに分かれて勉強の工夫を話し合ったり、2級に挑戦中の生徒が3級受験を控えた生徒によく出るところを教えたりしていた。最後の時間は、皆で、これから簿記に挑戦したい人達に向けて動画を作成した。経理研究所の方もその動画を視聴し、喜んでくださった。動画は新入生にも紹介し、簿記に挑戦する生徒を増やしていければと考えている。

【生徒の感想】

①最初の活動で「なぜ日商簿記を取りたいのか。」という質問を友人から受けました。その時「将来お金のことを知っていた方が役に立つから」という漠然とした理由しか頭にありませんでした。しかしこの質問を通して日商簿記という資格が具体的にどう活用されているのかを調べ、知ることができ、意欲につながりました。また、同じ学年の人が日商簿記2級に合格したことを知りとても刺激を受けました。以前私は、2級の勉強が難しくテストを受けることを先延ばしにしてしまいました。しかし合格した人を見習ってまた勉強してみたいと思いました。身近に合格した人がいるということはこの活動を通して知れて良かったです。同じ目標を持った仲間と一緒に勉強をするとさらにやる気が増し、日商簿記の勉強が捗りました。このプロジェクトを選んで良かったです。

②日商簿記プロジェクトを通じて、助け合いの重要性を知ることができました。簿記の勉強で分からないことがあったときに、聞ける友達がいたので、よく簿記について理解することができました。また、一人じゃないと感じることができて、前向きに勉強に励むことができました。簿記の勉強では、範囲が広く、新しい分野の学習と既習分野の復習を同時に進めていかないといけな

いところが大変でした。友達と進捗状況などを話すなど、簿記のことを話題にできるのがとても楽しかったです。



左：勉強の進捗具合を話し合う生徒達



右：最終回でメンバーが作成した動画のシーン

9 模擬国連（担当：小泉 生徒8名参加）

1年次にオンラインで開催された外部の企画「全国中高校生新人模擬国連大会(MUNR)」「全国高校教育模擬国連大会(AJEMUN)」に参加した生徒達が、「今度は自分達でも開いてみたい」とこのプロジェクトに集まった。昨年度の休校中、オンラインで数々の模擬国連に参加しすっかり夢中になった57期生のリードのもと、6月6日に校内模擬国連を実現した。このときは緊急事態宣言適用期間の日曜日は校内で活動できないルールがあったため、Zoomで開催。議長は57期生、会議監督は58期生が務め、1～3年生計26名が参加し、議題「死刑モラトリアム」について各国大使の立場から意見を述べ合った。

校内に模擬国連に詳しい教員がいない中、過去の模擬国連大会を参考にし、議題選びからオンライン上の進行、資料作りまで、すべて生徒達で行っていたことは称賛に値する。生徒の自主・自立の気概を大いに感じた企画であった。

2022年3月20日には、新入生6名を招き、21名で「食糧安全保障」を議題に据えた校内模擬国連を行った。本校視聴覚室で開催、待ちに待った初の対面開催の実現である。この回は議長・会議監督とも58期生が務め、それまでリードしてくれていた57期生は一大使に。慣れた在校生達が新入生とペアを組み、

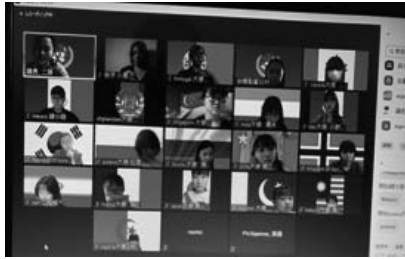
有意義な議論を展開した。

57期生は大学生となるが、今後もアドバイザーとして指導に来てくれるとのこと。クラブ活動のみならず、こうした活動も大学生（卒業生）と繋がりを広げていき、リードしてもらいながら学びを深めていけるとよいであろう。このプロジェクトの時間内には、ひたすらPC教室でリサーチ活動を行った。模擬国連の企画を実行するには準備の時間確保が何より重要となる。僅かではあるが、LHRの中でメンバーが一斉に準備できたことは大変有意義であった。

【生徒の感想】

①6月に初めて模擬国連に参加したときは、わからないことが多々ありました。国の大使として、自国についてどのように説明するか、どのように意見交換をするか、などとても難しかったです。2学期に取り組んだ論文では、5人で分担して完成させることができました。先生のアドバイスを取り入れながらも、ほとんど自分達の力で創り上げたと思うと、達成感を感じます。世界の国の状況や他の国との違いなどを知る良い機会になったと改めて思うし、参加して良かったと思っています。また3月に活動があるので、前回よりも積極的に参加していきたいと思います。

②1年生の時に、模擬国連に参加して正直準備とかが大変だなと思っていた。しかし、2年生になりもう一度模擬国連に参加してみると大変だなと思わなくなり、世界の問題をたくさんの人に知ってほしいと思うようになった。この模擬国連を通してたくさんの壁にぶつかったが仲間と協力して最後まで成し遂げることができたので諦めずに頑張ってきてよかったと思った。自分たちが模擬国連を通して、世界の問題を解決するのに役立つのは小さいことかもしれないが少しでもたくさんの人に知ってもらうためにこれからも頑張っていきたい。



左：6月に実施した校内模擬国連（死刑モラトリアム）
 右：2月に実施した校内模擬国連プレ企画（食糧安全保障）

10 模擬裁判（担当：小泉 生徒10名参加）

模擬国連同様、1～3年生の有志が参加し、「高校生模擬裁判選手権」出場に向けて協力しながら進める活動である。が、所属するクラブ活動も異なり放課後に全員が揃わない中で議論するため、皆で意見をまとめていくのが難しい状況に陥っていた。このプロジェクトの時間内で少しでも予選・本選準備を進めていけるよう、台本を読んで間接事実を書き出したり、大会参加後の反省を全体の集まりに先駆けて行ったり、まずは2年生が中心となって下準備的な作業をしておく時間に充てた。6月に行われた日弁連主催の「第14回高校生模擬裁判選手権」東京地区予選大会は優勝、8月に行われた本選は銀賞、12月に行われた「第2回オンライン高校生模擬裁判選手権」は優勝を収めた¹⁶。

【生徒の感想】

①LHRの時間帯だけでなく、その他の時間でも活動があったため、部活動と両立するのがとても大変でした。しかし、原稿読み、ドキュメントの訂正にはなるべく参加することができたのでその点は良かったと思いました。今回の題材は恋愛、昔の身分問題など普段の私からは少し考えにくい部分がキーとなるものだったので、弁論や論告を考える時、色々と調べつつ自分の考え

¹⁶ 刑事弁護オアシス「第2回『オンライン高校生模擬裁判選手権』で、中央大学杉並高等学校が優勝」 <https://www.keiben-oasis.com/14229>

と照らし合わせながら他の人の意見を聞いて試行錯誤するのを何回も何回も繰り返しました。今までは尋問や質問ばかり考えていたのでまた新しい経験をすることができました。やはりみんなで意見を出し合いながら自分たちの意見を確立させていく模擬裁判は面白い、楽しいと感じさせられました。部活との両立は大変だとは思いますが、また参加したいと思います。

②裁判について知れるだけでなく、文章力や、ひらめき、まとめ方、協力、積極的な発言などなど、多くのことを学ぶことができました。まさに総合学習だなと思います。難しいこともたくさんあったけれど、最後まで粘って頑張り、掴み取った優勝は本当に嬉しかったです。夏の賄賂の裁判の時は、プロジェクト学習の時間に、みんなで金額を書き出して、綺麗にまとめて、なんとか理解しようと頑張りました。様々な事件の論告、弁論を考えられたこの経験は、将来的に役に立つと思いました。



左：プロジェクトの時間内で台本の下読みをしておく
 右：全体が集まったときは話し合いを発展させ、解釈をより深める

11 日経ストックリーグ（担当：小泉 生徒3名参加）

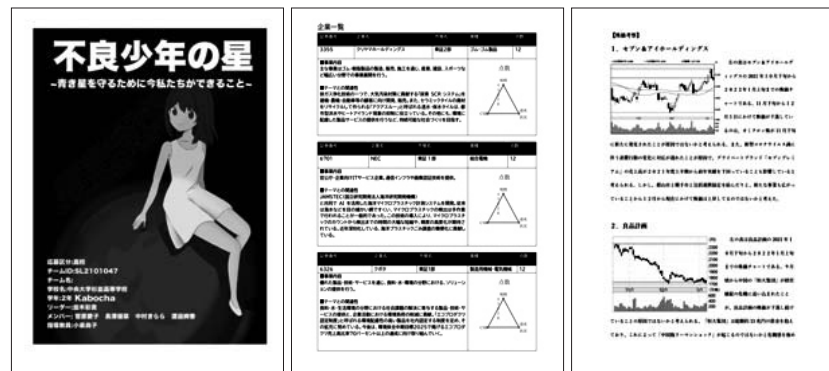
野村ホールディングス・日本経済新聞社主催の「日経ストックリーグ」¹⁷に応募したい生徒が集うプロジェクト。3～5名でチームを組み、1月に30枚のレポートを提出する活動である。毎年、全学年の中から1～2チーム挑戦して4年目になるが、今年は他のプロジェクトに所属する2名も加わり、女子5名でレ

¹⁷ 日経ストックリーグ <https://manabow.com/sl/>

ポート作成に挑んだ。彼女達はテーマを「SDGsの環境保全方面」とし、海の豊かさ・陸の豊かさを守る企業、気候変動に対し対策を考えている企業等をピックアップし、スクリーニングを行い模擬株式投資を試みた。途中、なかなか集まらず応募を断念するかと思ったが、話し合いの結果、「頑張って皆でレポートを仕上げよう」となったようだ。年末年始に追い込み、無事応募まで辿り着けた。惜しくも入選とはならなかったが、丁寧に株価変動の分析をする等、力作に仕上がっていた。

【生徒の感想】

- ①約30ページのレポートを書かなければならなかったので完成させることがとても大変でした。しかし、なかなかこういうレポートを書く機会はないので難しかった分、出来上がった時の達成感がとてもあり、参加して良かったなと思いました。また、普段は調べることがないような企業の細部まで調べてみたり、株式投資の仕組みを知ったり、環境問題について詳しく知ったりと今まで知らなかったこともたくさん知ることができました。今まで知らなかったことを知ることはとても楽しかったしとてもいい経験になりました。
- ②私の担当の一つに、投資家へのアピールというのがあり、その中でいろいろな新しいユニークな企業やこれから活躍していこうと予測できる企業を探していたのですが、それを通してこの社会にはいろいろな活動があるのだなと感じました。たくさんの知らなかった企業、期待できる企業があり、既にある自分が知らないことを知れたことがとても面白く、これからの学びに繋がるように感じられました。



左：表紙、 中央：企業分析、 右：株価変動についての考察

12 ビジネスコンテスト（担当：小泉 生徒15名参加）

日本政策金融公庫主催の「高校生ビジネスプラン・グランプリ」¹⁸への応募を目標とするプロジェクト。このコンテストの良いところは、主催の方が事前学習として出張授業を実施し、（今年はオンラインで開催した）、途中、生徒が作ったプランの足りないところを指摘し、さらに事後学習として発表会に立ち会い講評をいただけるところにある。

教員以外の大人が相談に乗ってくれると、生徒は新たな視点を心得て俄然張り切るようになる。コンテストに出ることは、社会（で活躍する大人）と繋がる一つの方法でもあり、繋がるのが生徒の主体性を引き出す要因となっていることを実感する。

2年生は仲の良いメンバー同士でそれぞれチームを組み、コロナ禍で思うように運動ができない学生に対してパーソナルトレーナーがつくシステムや、高齢者の方々に食事を宅配するサービス、「推し活動」と地域活性化を掛け合わせ、観光事業を盛り立てるビジネス等、さまざまなプランを考えた。既存のシステムやサービスから一歩外に出るプランを考えなければならぬため、生徒

¹⁸ 高校生ビジネスプラン・グランプリ <https://www.jfc.go.jp/n/grandprix/>

は頭をひねりながら話し合いを重ねていた。また、収支計画も現実味があるか、利益が出るのかと気にしながら何度も計算をしていた。「起業する」ことの大変さが少し味わえたようである。

【生徒の感想】

①自分が一番楽しいと感じていた時は、グループで一緒に通話しながらビジネスプランについて考えていた時です。もちろん、どんどんアイデアを出すのは少し大変でしたが、それ以上に様々な会話ができて、この頃が一番楽しかったです。そして大変だったことは、通話で決めたビジネスプランにどんどん肉付けしていくところです。この工程では、このプランをどういう人達をプランの対象にし、どういうところが他のアプリやサービスと違って、どこそこが強みであると考えなければなりません。これが自分にとっては一番大変でした。

②最も大変だったのは、費用面の問題だったように感じます。内容を具体的にしていけばいくほど、お金の計算は変わってきて、土地代、人件費、資源費用、機械などの電気料金、そして利益などを1年後と10年後と両方計算しなければならないため、それだけでもかなり頭を悩ませました。一度計算し終わっても、ここの部分を変えたい、もっとこうしたい、と言う意見が出てくると、また最初から計算し直さなければならなくなり、本当に頭がパニックになりました。でも、結果的に納得いくような案がでてその計算が終わった後の達成感は本当に凄くて、やりがいを感じました。終始、自分が本当に社長になって起業するののかのような感覚に陥りましたが、実際の起業というのは資金の調達などもありもっと大変なのだろうと思うと、大学生や高校生で起業している人は本当に凄いなと思いました。

みんなでたくさんプランの内容を考えられたのも楽しかったです。



左：グループでプランを話し合う活動



右：プラン発表会、Zoomで計画書を画面共有し、主催者の方に講評をいただく

III 今後の課題

2月最終回のプロジェクト活動を終え、生徒にアンケートで活動の満足度を問うたところ、以下の結果が得られた（201名回答）。

大変満足している	34.3% (69名)
まあまあ満足している	49.3% (99名)
普通	13.9% (28名)
あまり満足していない	2% (4名)
全然満足していない	0% (0名)
その他（1学期は欠席したため、参加できなかった）	0.5% (1名)

「大変満足している」「満足している」の合計が8割を超えたところを見ると、この試みは概ね成功したと言ってよいのではないかと思える。「あまり満足していない」と答えた4名が理由として挙げたのは、「活動内容が足りなかった」「物足りなかった」という意見であった。「もっとこうすればいいと思った、こうしたかった、ということがあれば書いてください」というアンケート項目の自由記述にも、「もっとプロジェクトの授業を増やしてほしいです。」「もう少し活動の回数が多くても良かったと思う。じっくり取り組むために。」という類の意見が5件寄せられた。活動をもっとしたかった、腰を据えて取り組み

たかったと思うのは大いに結構なことであろう。その他、「留学生の方々との交流会はすごく楽しくて、本当に様々なことを知れたので、自分達以外のプロジェクトの人にも共有できたらよかったなと思います。」(台湾)のように、学んだことを他のプロジェクトの仲間にも紹介したかったという意見もあった。このような活動を行う際、成果や反省を言語化し他者と共有する場は事あるごとに設けた方がよいであろう。今回は2学期に1回、3学期に1回、短い時間内での振り返りを設けるのみだったのが反省点である。本活動の意義を改めて確認するためにも、発表や感想を存分に披露する場を用意することの必要性を感じた。

生徒から寄せられた他の感想としては、「自分達でもっと計画的に進めるべきだった」という意見もあった。「レポート作成はみんなの予定が合わず、最後に詰め込んだような形になってしまいました。自分の担当したところは一生懸命にやれたように感じます。でも、やはり最後にみんなで一通り確認して、みんなの意見が盛り込めるような形にしたかったので、完全に分担になってしまったのが悔しい気がします。」(日経ストックリーグ)「もっと活動日数・時間の改善ができれば良かったと思います。特に検察側は、後半になって時間が足りずに焦ることが多かったので(私たちの怠惰も原因です)、余裕を持って本番に臨めるよう、準備時間の調整をしなければならないと思いました。」(模擬裁判)というように、コンテスト応募や試合準備のためにはもっと計画的に日程調整をするべきだったと述べている。生徒は活動に熱心になればなるほど、もっと時間をかけて打ち込みたいと考える。また、締切間際に活動するだけでなく、計画を立て余裕を持って取り組むことの大切さを身をもって知る。もちろん教員側からの促しも大事だが(今回もいつまでにこれをやるといいよ、とは何度か伝えていた)、生徒が自ら気づくことも必要であろう。この反省を落胆に繋げてしまうのではなく、次の活動への前向きなモチベーションになるよう働きかければ、次回から生徒が自ら主体的に動けるようになると思う。

もっと自分達の方から積極的に動きたい、視野を広げてみたいという声もあ

た。「時間があれば、自分でボランティアの内容について考えたり、ボランティアに協力してくれそうな団体を調べたりするところからできたらもっとよかったかなと思いました。」(ボランティア)「生徒が楽しめるイベントを、コンサートプロジェクトを選んだ生徒が一から考えて作り上げていきたかった。」(コンサート)「SDGsについて初めから賛同する立ち位置ではなく、賛同できない人の意見や考え方なども扱えたらもっと面白いかもしれない。」(グローバル)「発表で主催者の方に言われたとおり、もう少し具体的に対象の範囲を絞ってよりフィットするアイデアを考えればよかったと思いました。」(ビジネスコンテスト)という意見である。やはりこれも次回の活動参加のモチベーションになることが期待できるであろう。各種活動やコンテスト参加を通し、もっと自分達が主体で動いてみたい、自分達のアイデアを改良したい、という意欲が出てきたことが窺える内容である。これを機に、もっと我々も生徒に任せてみていいのではと思うし、もっと社会に繋がるようにしてやるといいのではと思う。何かをやり遂げた達成感や、教員以外の大人(社会)と繋がる経験は、生徒を格段に成長させる。

その他、「冬休みにオンラインで話し合ったが難しかったので、やはり直接会って話し合った方が、アイデアが出てくると思った。」(グローバル)「人数が多すぎて少しうるさくなってしまうたり、話を聞いていなかったりなどが見られたので、もう少し搾って全体がまとまりやすくしたら、一人一人がより深く学習できると思いました。」(台湾)というように、適切な場と人数を考えなければならぬ課題も見えてきた。活動をするのに一グループ何人程度が望ましいか、オンラインで進めなければならないときはどのようにすればうまく進行できるか等、今後検討していきたい。

IV おわりに

2022年度から高校の学習指導要領が改訂し、本校でも新カリキュラムの中で「総合的な探究の時間」(1単位、土曜2限に実施予定)が始まる。今回試み

た"プロジェクト学習"は、凶らずも「探究の時間」で2年次に行う活動内容を組み立てる大きなヒントとなった。新カリキュラム実施後、2年次では「探究の時間」で「研修リーダープロジェクト」と「アカデミックプロジェクト」に分かれ、各自が興味関心を抱いたプロジェクトに所属する。「研修リーダー」は研修旅行のテーマについて、他の参加者に先んじて調査を進め問いを立て、参加者の研修をリードする役割を担う活動を、また「アカデミック」は大学の各学部と連携して学びを深め、理数系の分野を追究する活動や商学的な知識を身につけつつビジネスコンテストに挑戦する活動等を想定している。これらの内容を、今回の"プロジェクト学習"で得られた手応えを参考にし、実施の可否を探りながら提案の形に整えていくことができた。

今までは課外活動として見なされていた、特定の教科の範疇に収まりにくい学習活動は、限られた積極的な有志が取り組むのみで良しとされていた。しかしこれからの教育においては、そういった活動が「探究活動」として位置づけられ、すべての生徒が関わるべきものとなる。我々は生徒の主体性をおしなべて喚起し、意欲的に取り組ませる必要があるのだ。裾野を広げることは教育活動の質を落とすことではないことを肝に銘じ、誰もが探究の楽しさを知れるよう、サポートに努めなければならない。探究活動を通して、生徒一人ひとりの、他者と積極的に関わり高め合おうとする資質が磨かれ、社会の中で生きる力が育まれるよう、プロジェクトの在り方を引き続き模索していきたい。